



伝統は進化する

Evolution in Tradition



AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024

あおもりねぶこフェスティバル2024 記録集



波

AOMORI
NEBUCO
FESTIVAL 2024



03	ごあいさつ
04	実行委員長あいさつ
08	AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024 について
10	NEBUCO Exhibition 1
	北村 隆14 (第6代ねぶた名人)
	竹浪 比呂央16 (第7代ねぶた名人)
	北村 蓮明18
	内山 龍星20
	大白 我鴻22
	諏訪 慎24
	北村 春一26
	北村 麻子28
	立田 龍宝30
	手塚 茂樹32
	林 広海34
	吉町 勇樹36
	福士 裕朗38
	塚本 利佳40
	野村 昂史42
	菊池 仙陽44
	木戸 永二46
	間山 マミー48
	DJ ライナス50
52	NEBUCO Exhibition 2
	サイトウ バビコ 56
	JAGDA AOMORI 58 (JAGDA青森地区有志メンバー)
60	関連展示
	西川 幸治
62	NEBUCO Products
64	NEBUCO Workshop
68	オープニングセレモニー、ほか
72	プログラムデータ
76	About AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024

謝 辞

本事業開催にあたり、多大な協力を賜りました皆様に深甚なる感謝の意を表します。

Acknowledgements

We would like to express our sincere gratitude to everyone for their generous support and contributions to the realization of this project.

【凡例】

- 各作家のプロフィールは作家から提供のあった情報を記載した。
- テキスト執筆者は、下記執筆者によるものとし、文末にイニシャルで記した。
斎藤 誠子 (SM)
高橋 忍 (TH)
中川 広樹 (NH)

【Note】

- Each creator's profile has been compiled based on references provided by the creator.
- Texts are provided by the following authors.
NH: NAKAGAWA Hiroki
SM: SAITO Masako
TS: TAKAHI Shinobu

ごあいさつ

「AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024」は、「世界最高の紙の芸術『ねぶた』の技法をアートとしてさらに育て、世界に発信したい」という思いに御賛同いただいた皆様の御協力のもと、今年度初めて開催される運びとなりました。

ねぶた師の皆様には、ねぶたの技法を用いて「波」をテーマにしたNEBUCOという作品を、地元アーティスト・クリエイターの皆様には、ねぶたにインスパイアされた作品をそれぞれに制作いただきました。また、1万人を超える国内外からの方々に御鑑賞いただきましたことを、本当に嬉しく思っております。

そして、今回の「AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024」が、ねぶたの芸術性の更なる発展への大きな一歩となることを期待しております。

結びに、AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024 実行委員会 葛西崇 実行委員長をはじめ、本事業に御尽力いただきました皆様に心から感謝申し上げますとともに、「AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024」における作品とその作品に込められた制作者の思いがより深く皆様に届くことを祈念いたします。

AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024 実行委員会 顧問

青森市長 西 秀記

実行委員長あいさつ

このたびの「AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024」は、2020年の「ねぶたアート創生プロジェクト」の後継事業という位置づけで、そのスピリットを継承しつつ、青森ねぶたの創造性、特にねぶたの技法や表現に着目し、また「伝統は進化する」をキャッチフレーズとして、新たな企画として再編し開催する運びとなりました。

まずは、この趣旨に賛同しご協力いただいた15名のねぶた師の皆様、青森で活躍するアーティストやクリエイターの皆様に深く感謝申し上げます。

今回、10,683名のお客様に足をお運びいただくことができましたのは、ねぶた祭り時期に重なったことに加え、青森港へ寄港するクルーズ船からのお客様がお越しくださったことが大きな要因となりました。これに加え、会場となった青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸が、港町青森の面影を深く残す市のシンボリックな場所であり、2024年が就航60周年という記念すべき年であったことから、このような大きなシナジー効果が得られたものと思っております。

結びに、本事業を開催するにあたり、物心両面からご支援を賜りました多くの皆様と、ご来場のお客様へ感謝申し上げます。

AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024 実行委員会 実行委員長

葛西 崇

AOMORI
NEBUCO
FESTIVAL 2024

あおりねぶこフェスティバル 2024 記録集



1F 車庫中庭 遊覽路線圖
環

大白浪濤
Ogino's Gate

AOMORI NEBUKO FESTIVAL 2024について

AOMORI NEBUKO FESTIVAL 2024(以下NEBUKO Fes)は、コロナ禍でねぶた祭が開催できなかった2020年、青森市が行った「ねぶたアート創生プロジェクト」の後継事業として企画され、ねぶたの技法を用いた「新しい造形／クリエイション」を国内外に発信することを目的としたものである。

2020年の事業では市内28箇所(39体)の「ねぶたアート」を配置して作品を巡る周遊観光的な目的も事業のひとつとなっていたと考えられるが、NEBUKO Fesではむしろ観光的な部分は削ぎ落とし、いわゆる「Exhibition／展覧会」という形式にこだわることで、青森市を中心に活動しているアーティストやクリエイターが、ねぶた独自の創造性をリスペクトするとともに、発想の源とした作品とともに発表することで、より作品としての形にこだわった発信をすることを目的とした。

15名の現役のねぶた師が制作するねぶたの「技法」や「表現」に着目した小型のねぶたを「ねぶこ NEBUKO」と総称し、祭りでのねぶたとは区別することとした。NEBUKOとは「ねぶた」の「ねぶ(NEBU)」と、接頭語「CO」と「発想、概念」という意味の「concept」、そして津軽弁で愛着のあるものを「〜っこ」と呼ぶことから作られた造語である。

今回のNEBUKO Fesのテーマを「波」としたのは、翌2025年が「みなとまち・あおもり誕生400年」ということに着目したからであるが、その時々に行われるイベントやトピックに寄り添ったものをテーマとすることで、NEBUKO Fesの連続性も視野にいたした展開を試みた。また、今回は「八甲田丸の就航60周年」と「AOMORI GOKAN アートフェスティバル2024」の時期にあわせ、夏季(7/31-8/12)に行ったように、今後もその時々イベントやトピックをテーマの源流とすることで、季節を問わずにNEBUKO Fesを開催できる可能性を含むようにした。

NEBUKO Fesは、Exhibition(展覧会)、Workshop(ワークショップ)、Products(商品開発)の3つのカテゴリで構成された。

Exhibitionは更に2つに構成され、Exhibition 1ではNEBUKOを中心に2名のアーティストや動画などのクリエイターの作品を展示した。Exhibition 2は、祭りでの「ねぶた」や「八甲田丸」、「海」など発想の範囲を少し広げた作品を展示した。

Workshopは、事前の告知も兼ねて出前講座として小中学生を対象とした「グローバル・サインボード」を制作し、NEBUKO Fes期間中にはExhibition 2と連動し展示を行った。また、NEBUKO Fes期間中のワークショップは、実際のねぶたの技法を用いて「coNEBUKO」というミニ行灯の制作体験を行った。

Productsは「祭りのねぶた」にまつわる商品とは一線を画すことを意識し、NEBUKOから新しく発想したテキスタイルをデザインして風呂敷・手ぬぐい・豆皿を、またNEBUKO Fesのロゴマークやメインビジュアルを用いた缶バッジや団扇を制作した。

これらの情報発信は専用ウェブサイトと各種SNSで随時更新し、NEBUKO Fes終了後もアーカイブとして閲覧できるようにした。

今回のNEBUKO Fesでは、ねぶた独自の創造性を広く周知することが最大の目的であるが、青森で活躍するアーティストやクリエイターなどが一致団結して協力することで、事業全体としては「オール青森」での発信も狙いのひとつであった。

実行委員会は青森商工会議所・青森観光コンベンション協会・青森ねぶた運行団体協議会・あおもりアーツカウンシルなどの団体で構成され、企画運営と事務事業全般については青森公立大学国際芸術センター青森のサポート組織であるエアーズ(A.I.R.S)が担った。また(一社)青森市国際交流協会/AIVAには、専用ウェブサイトや期間中の配布資料の多言語翻訳のほか、さまざまな部分で協力いただいた。そして、期間中のサポートスタッフは市内大学生が多数参加した。

最後に、今回参加したねぶた師からは「テーマが決められているので、ねぶた師の技量や個性が出て非常に面白い」、「どれひとつとして同じ波がない、今後も是非継続してほしい」という声をいただいた。来場者からは「ひとつの会場ですべてのNEBUKOをみることできるのは大変ありがたい」、「次のテーマは？」などと継続を望む肯定的な意見を多数得ることができた。

青森市民にとって祭りとしての「ねぶた」は、これまでも数多く見てきており、馴染み深いものではあるが「技法」や「表現」に着目して制作されたNEBUKOを通して、これまで見過ごされていた「ねぶた」のもつ創造性や可能性の高さに改めて気づききっかけとなったのではないだろうか。

高樋 忍



NEBUCCO Exhibition 1

NEBUCO Exhibition 1

青森市により開催された「ねぶたアート創生プロジェクト」を引き継いだ本展では「ねぶたアート」を提示することが課せられていた。

「アート」は、ギリシャ語の「テクネ」を古代ローマ人が翻訳したラテン語の「アルス」に語源をもち、歴史的な変遷はあるものの、広義には「創造性を伴った技」を意味する。現在の一般的な会話のなかで、従来の分類における芸術作品以外に「アート」が用いられる場合、そこにはいわゆる近現代美術におけるジャンルに寄せた特徴か、何か^{おどろ}愕くべき技巧が認められる創作に適用されているように見える。ねぶたのような立体造形物の場合は、絵画的か彫刻的、あるいは現代美術のインスタレーション的特徴がみられると「アート」だといわれるのかもしれない。しかし当然のことながら、その制作物はねぶた本来の表現からは離れていく。「ねぶたアート」のこの矛盾を出発点に、本展ではそれをねぶたにおける「創造性を伴った技」と定義し、展覧会を構成した。

ねぶた祭りの審査員を務めていた時、一番興味深かったのは、細部を観察して出した評価と、祭りという特殊な場でみる全体像に対する評価との隔たりである。一方、制作的観点からみれば、大賞を取ったねぶただけに興味深いわけではなく、それぞれの制作者や流派のスタイル／様式ともいうべき個性や特性も興味深い。そのため本展では、複数の制作者にねぶた師にとってはごく当たり前の「波」をモチーフとした小品の制作を依頼し、ねぶたにおける波の表現そのものとその差異を示すことで、ねぶた独自の美意識や技、特性に加え、ねぶた師がその枠組みの中で実践する創意工夫、オリジナリティ、作家性が示されることを目論んだ。また、ねぶた本体とは異なる創造性の発露を鑑み、これら創作物の名称を「ねぶこ NEBUKO」とした。

結果として、伝統的な技や作家独自の技法、新しい表現方法を採用した作品など、それぞれの発想や美意識が反映された、「ねぶたにおける創造を伴った技」の多様なバリエーションを表す波が集まった。

さらに本展では、画家の木戸永二といけばな龍生派の菊池仙陽も展示に加わった。彼らは会場、他の作品とのバランスを考慮し作品を制作／選択したのだが、彼らの作品は、この

展覧会を「波をモチーフにしたねぶた技法で制作した作品展示」としてだけではなく、八甲田丸という青森港を象徴する場での展示を、一つの物語としてまとめる強力な語り手になってくれた。

菊池は5種類の紙と鉄枠を用いた作品を制作し、作品はNEBUKOが円を描くように設置された会場の中央に置かれた。素材の「^{かお}貌」を見せる龍生派らしく、それぞれの素材にはほとんど手を加えておらず、そのためむしろ紙そのものの色や形が立ち現われ、素材の表情の反復と差異が、周囲の波の造形物と合わさることで静かな波紋のようにもみえる。本来は縦型であった作品は、会場に合わせ横置きにされることで、波に守られるような、あるいは波から生まれ出るような場面を想起させた。

支持体の板にジェッソほか独自の下地を何層も重ね、表面を彫刻刀で削り、描いていく木戸は、本展では大きく枝を広げた林檎の木が描かれた三幅対の《I know you, memories》とその両脇に炎が立ち上がるような《Bark 1》、《Bark 2》を展示した。白地に細い彫り込み線で描かれた作品は、見る角度により内在する光と色を発現させ、下地の素材の硬軟は、描線に造形的な表情の豊かさを与える。そのため遠目で見ると静かに佇むようにみえた線描の木は、近づくと象徴的かつ神々しく立ち上がる。木戸はしばしば会場に合わせ既存の作品に加筆し、再構成して展示を行う。今回の展示での寄せる波の先の暗がりには浮かぶ霊的な存在としての林檎の木は、海と陸双方の生命の物語を表しているようにみえた。

これに加え、会場内のモニターでは、ねぶた祭り全体の雰囲気から着想された、間山マミーによる動画とアニメーション、オープニングアクトを飾ったDJ ライナスの動画作品が展示された。彼らの作品からは、青森のクリエイターたちがどのようにねぶたをとらえているか、その深い愛情が感じられた。

「本市を代表するねぶたアート」というからには、ねぶたを中心に据えたい。それらをほかのジャンルの様式に寄せるのではなく、それらを中心に広がる創造の連鎖を示したい。その一方で、影響の有無に関わらずこの風土が生んだ創造の力としての作品もある。それらの一端を本展で示すことができれば幸いである。

近藤 由紀

第6代 ねぶた名人

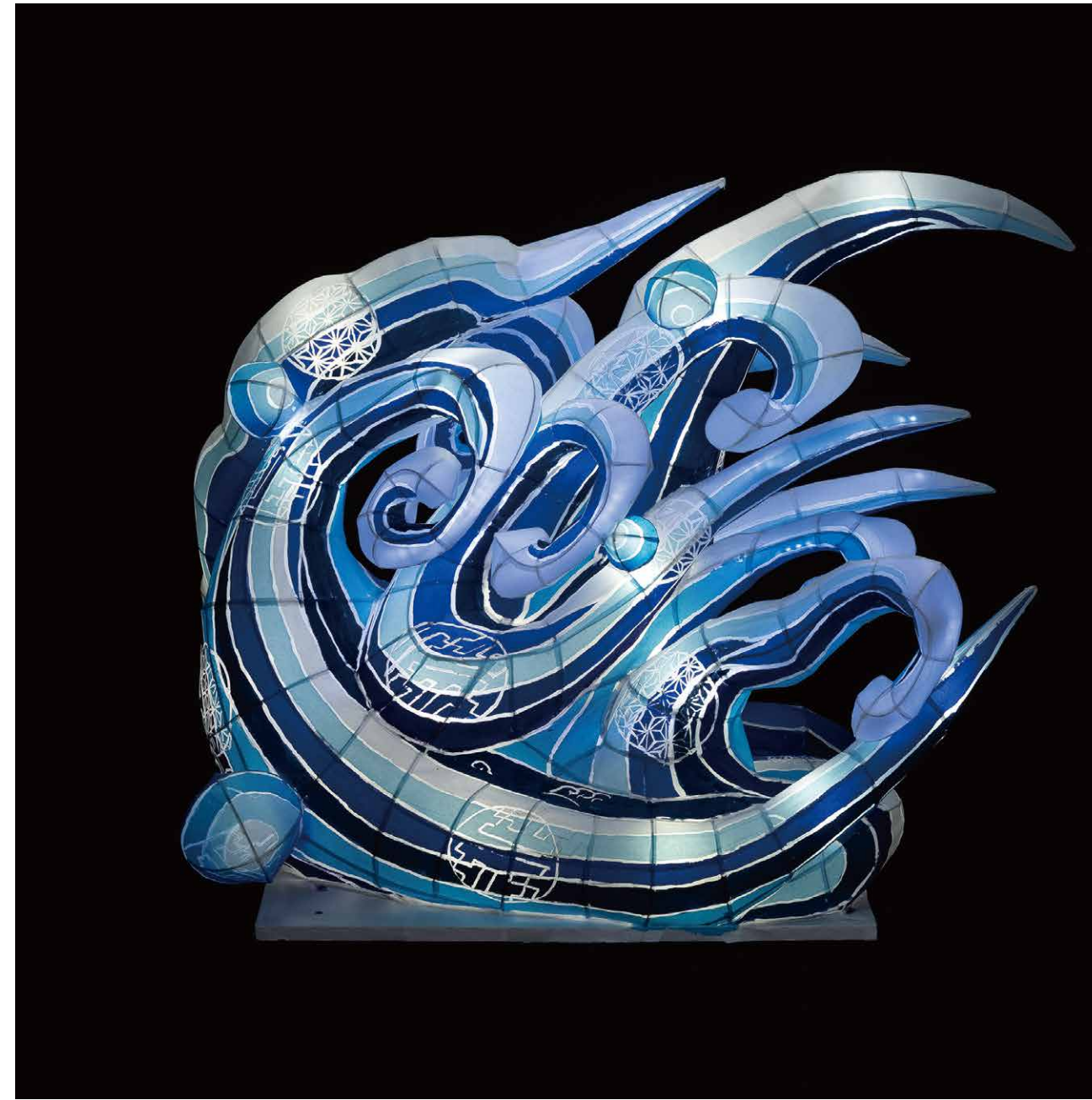
北村 隆

6th gen. Grandmaster
KITAMURA Takashi

「荒波」を表現するため、浮世絵風の和風の柄(麻の葉、紗綾形など)を入れ、ぼかしを用いない色のグラデーションを使うことで、面白みのある新しいイメージを試みた。波の制作は難しく、今回の制作に際しては、下絵は3枚描いて、サイズや色合いなどの構図を検討した。

1948年双子の兄として青森市に生まれる。1962年中学2年で北川啓三(第2代ねぶた名人)に師事。1965年に兄弟で大型ねぶたを制作、以後制作を休止する。1978年より大型ねぶたの制作を再開。2012年第6代ねぶた名人となる。

Born in Aomori City in 1948 as a twin brother. In 1962, while in his second year of junior high school, he began his apprenticeship under Kitagawa Keizo, the 2nd gen. Nebuta Grandmaster. In 1965, he built his first large-size Nebuta alongside his twin brother. 1978, they started making large-size Nebuta again. In 2012, he was inducted as the 6th gen. Nebuta Grandmaster.



D83×W130×H106cm

第7代 ねぶた名人

竹浪 比呂央

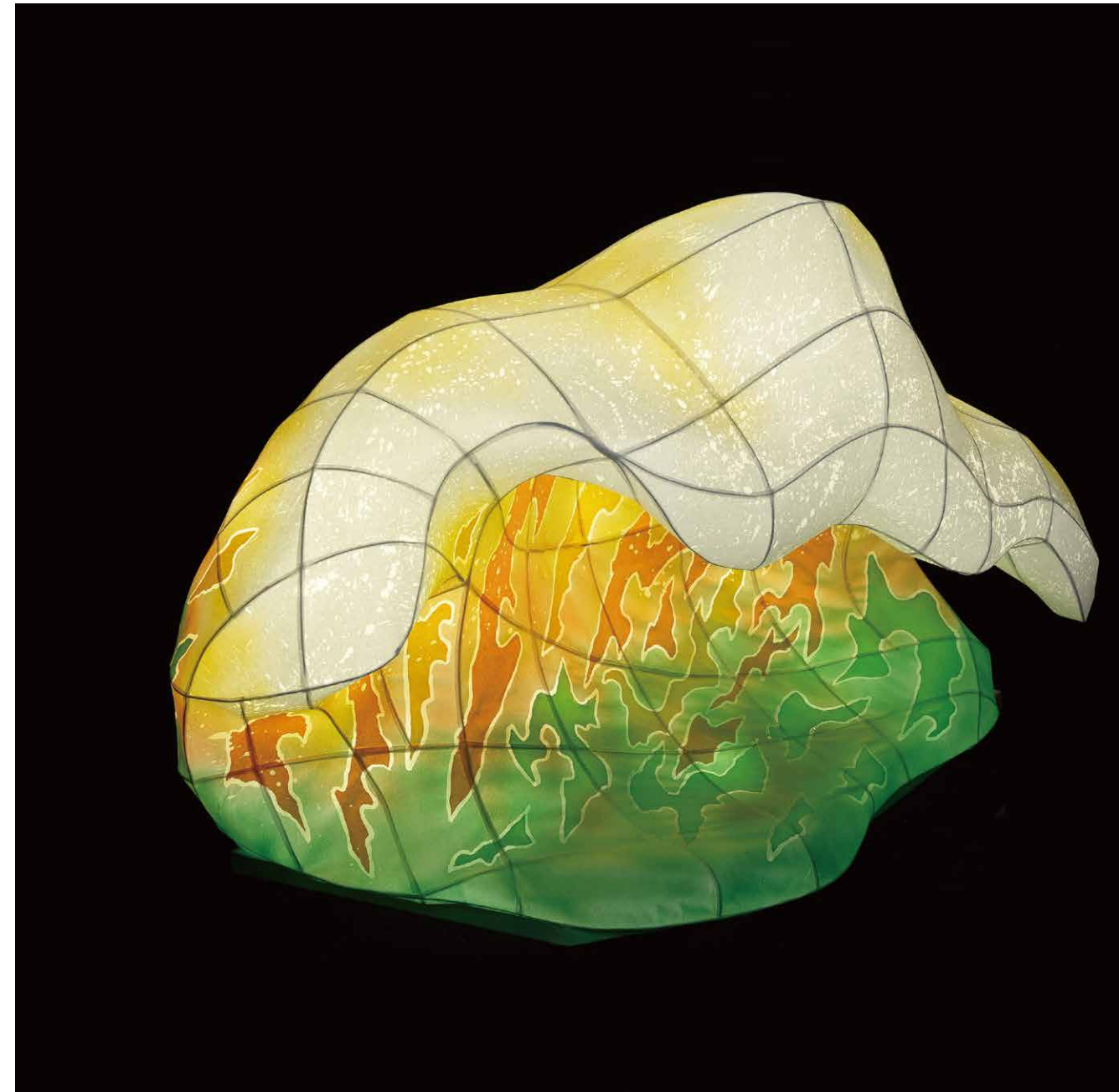
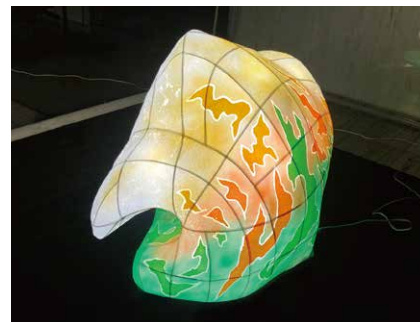
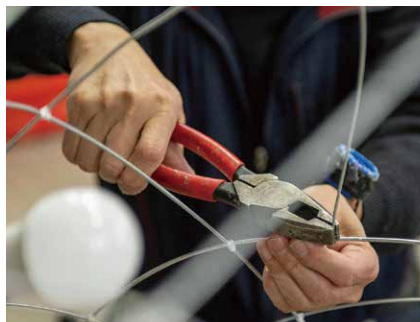
7th gen. Grandmaster
TAKENAMI Hiroo

通常のねぶた制作では「色」にこだわっており、最終的に色をどのように見せたいかによって、補色関係や、骨組を考えている。

今回のNEBUKOの「波」は、祭りの大型ねぶたでもよく取り上げられる素材だが、ここでは一般的に波に用いられる青色は使わず、全く異なるクリエイティブな作品として制作した。

1959年青森県西津軽郡木造町(現つがる市)生まれ。千葉作龍(第5代ねぶた名人)に弟子入りし、1989年より大型ねぶたを制作。2023年第7代ねぶた名人となる。竹浪比呂央ねぶた研究所を主宰し、青森ねぶたの創作と研究を行うとともに、「紙と灯りの造形」としてのねぶたの可能性を探る。

Born in Kizukuri Town (currently part of Tsugaru City) in 1959. He began his apprenticeship under Chiba Sakuryu, the 5th gen. Nebuta Grandmaster. He started constructing large-size Nebuta floats in 1989. In 2023, he was inducted as the 7th gen. Nebuta Grandmaster. He is the director of the Takenami Hiroo Nebuta Research Institute, where he carries out research and creation of Aomori Nebuta, and also explores the possibilities of Nebuta as “paper and light sculpture”.



D90×W125×H90cm

北村 蓮明

KITAMURA Renmei

ねぶたにとって細部の表現は、ねぶたの人形部分を生かすようなものであり、ねぶたの場面の物語を引き立たせるための大事な部分である。

今回のNEBUKOは、とにかく悩み、下絵も何枚か描いた。どのような動きにするのか、また、決まったサイズに納めるように考えるのも難しい。色彩はもっと悩み、色で波の荒々しさを表現したいが、濃い色をつけたくはないと思った。

1948年双子の弟として青森市に生まれる。小学4年から兄弟でねぶた作りを始め、1962年中学2年で北川啓三(第2代ねぶた名人)に師事。1965年に兄弟で大型ねぶたを制作、以後制作を休止する。1978年より大型ねぶたの制作を再開。

Born in Aomori City in 1948 as a twin brother. In 1962, while in his second year of junior high school, he began his apprenticeship under Kitagawa Keizo, the 2nd gen. Nebuta Grandmaster. In 1965, he built his first large-size Nebuta alongside his twin brother. 1978, they started making large-size Nebuta again.



D106×W114×H95cm

内山 龍星

UCHIYAMA Ryusei

通常ねぶたを制作する際には、たとえば「火」を表現するとしたら、どちらから風が吹くか、勢いはどうかなどのストーリーを考え、動きをだす構図を意識して制作している。

今回のNEBUKOについては、あえて下絵を描かず、気持ちで作るようにした。波というテーマは、さまざまに解釈できる分難しい。ねぶたの技法を生かしながら、覆い被さるような勢いのある波をイメージして制作した。色彩については、大いに悩み、紙の白さをそのままにするか、色つけするか、照明の色味も色彩にあわせて、さわやかな白さを生かす昼光色か、昔ながらの電球色かなど検討した。

1962年青森市生まれ。1976年に千葉作龍(第5代ねぶた名人)の弟子となる。1987年より大型ねぶたを制作。

Born in Aomori City in 1962. He became an apprentice of 5th gen. Nebuta Grandmaster Chiba Sakuryu in 1976. He began building large-size Nebuta in 1987.



D90×W123×H89cm

大白 我鴻

OHSIRO Gako

ねぶた制作では、節が隆起した手や、鼻に横骨を入れない面の作りなど、我生会*の制作スタイルにこだわっている。

今回のNEBUKOは、造作で細かく波を表すのではなく、大きな波の形の中に波の絵柄を細密に描く「これが我生会だ」という昔ながらの一門のスタイルとした。また、勢いのある強い波とするために、濃い青色とし、ほかのねぶた師さんとは大きく違うスタイルになるようにした。

青森市生まれ。ねぶた師の一戸意生、穂元鴻生に師事。2005年より大型ねぶたを制作。

Born in Aomori City. Studied under Ichinohe Isei and Akimoto Kosei. He has been building large-size Nebuta since 2005.

*「我生会(がしょうかい)」は、鹿内一生(第4代ねぶた名人)が起こした。



D90×W120×H83cm

諏訪 慎

SUWA Makoto

普段は基本的に一人で制作するため、大型ねぶたを際立たせるための背景となるような細部、いわゆるエフェクトは作らない。手間がかかるため、実は、ほとんど波は作ったことがない。

今回のNEBUKOは、さざなみをイメージした。合作というイメージが強かったため、葛飾北斎風の大波が多くなると予想し、全体で海のような展示になるのであれば、さざなみもよいのはと考えた。LEDのテープライトの粒々(玉の目)は本来なら嫌われるが、今回は波の先端部の泡立つ感じを際立たせるには都合が良いと思った。波の先端部以外は、昼光色のライトをつかって、少し光る色の対比をみせようと考えた。

1978年青森市生まれ。北川金三郎(初代ねぶた名人)の系譜で、ねぶた師石谷進に学ぶ。2007年より大型ねぶたを制作。

Born in Aomori City in 1978. He is a descendant of the First gen. Nebuta Grandmaster, Kitagawa Kinzaburo, and apprenticed under Ishiya Susumu. He began building large-size Nebuta in 2007.



D90×W120×H87cm

北村 春一

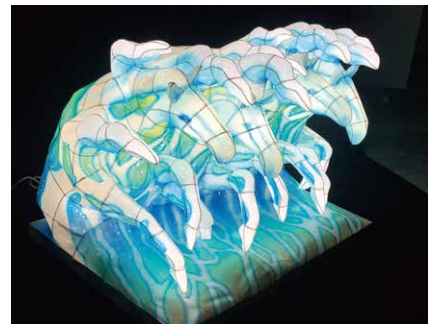
KITAMURA Shun'ichi

普段のねぶた制作では、制作するものによって異なるが、例えば波であれば波頭を際立たせるようにするなど、造形する際には骨格にこだわる。これからのねぶたは、技術の進歩によって一昔前とは変わっていくと思うが、実際にはその時の想いやイメージ、作ってみたいと出てこない発想もある。

今回のNEBUKOでは、祭りの大型ねぶたとはい違う、作品としての波を考えた。自然災害ではじまった2024年、荒波を乗り越えていこうという意味で、馬の群れが協力して駆け抜けるような形とした。

1981年青森市生まれ。ねぶた師北村蓮明の長男として生まれ、2007年より本格的に師事。2011年より大型ねぶたを制作。

Born in Aomori City in 1981 as a son of Nebuta artisan Kitamura Renmei. He fully committed to his apprenticeship under his father in 2007. He began building large-size Nebuta in 2011.



D90×W120×H90cm

北村 麻子

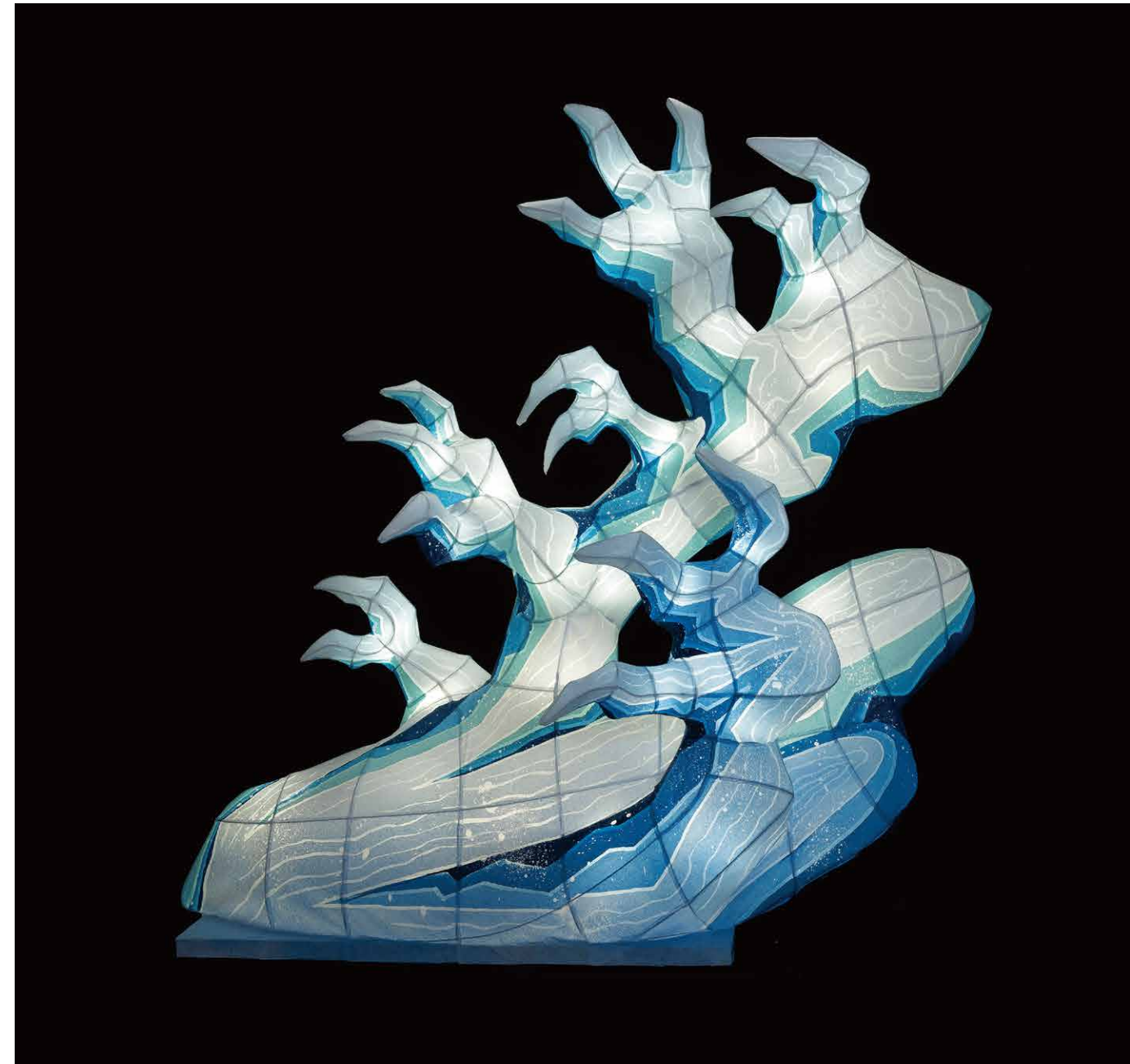
KITAMURA Asako

今回は父から教わった「波」ではなく、自分なりの「波」にしたいと考えた。着色についても大型ねぶたでは使ったことのないブルー系を今回の「波」では使おうと思っている。

通常のねぶたでは、作品(題材)によって、人形部を引き立たせたり、逆に細部を引き立たせたりしている。リズム感が出るように、人形部と細部の表現には強弱をつけている。

1982年青森市生まれ。ねぶた師史上初の女性ねぶた師。2007年父親(第6代ねぶた名人北村隆)の制作した大型ねぶた「聖人聖徳太子」に感銘を受け、ねぶた師を志す。2012年より大型ねぶたを制作。

Born in Aomori City in 1982 and is the first female Nebuta artisan in the history of Nebuta. In 2007, she was impressed by the large-size Nebuta "Shotoku Taishi" created by her father (the 6th gen. Nebuta Grandmaster Kitamura Takashi) and decided to become a Nebuta artisan. She has been creating large-size Nebuta since 2012.



D67×W132×H140cm

立田 龍宝

TATSUTA Ryuho

偶然聴いた「パフ」(1963年、ピーター・ポール&マリー)という楽曲からインスピレーションを受け、今回の作品に「龍」というモチーフを用いることを思いついた。自分は龍の字を背負っており、また今年が「辰年」ということもあり、波で龍を表現してみることにした。

今回の「波」もそうだが、ねぶたの背景となる部分は、大型ねぶたの場面を作るいわば脇役ではある。しかし、実際の制作には手間もかかるが、手間をかければかけるほど、良いねぶたになると思う。

1985年青森市生まれ。中学2年でねぶた師内山龍星の弟子となる。弘前大学教育学部卒業後、母校の青森工業高校で4年間勤務。2013年より大型ねぶたを制作。

Born in Aomori City in 1985. When he was a 2nd year junior high school student, he began his apprenticeship under Uchiyama Ryusei. A graduate of Hirosaki University, he was first employed for 4 years at his alma mater, Aomori Technical High School. In 2013, he made his debut building large-size Nebuta.



D103×W132×H97cm

手塚 茂樹

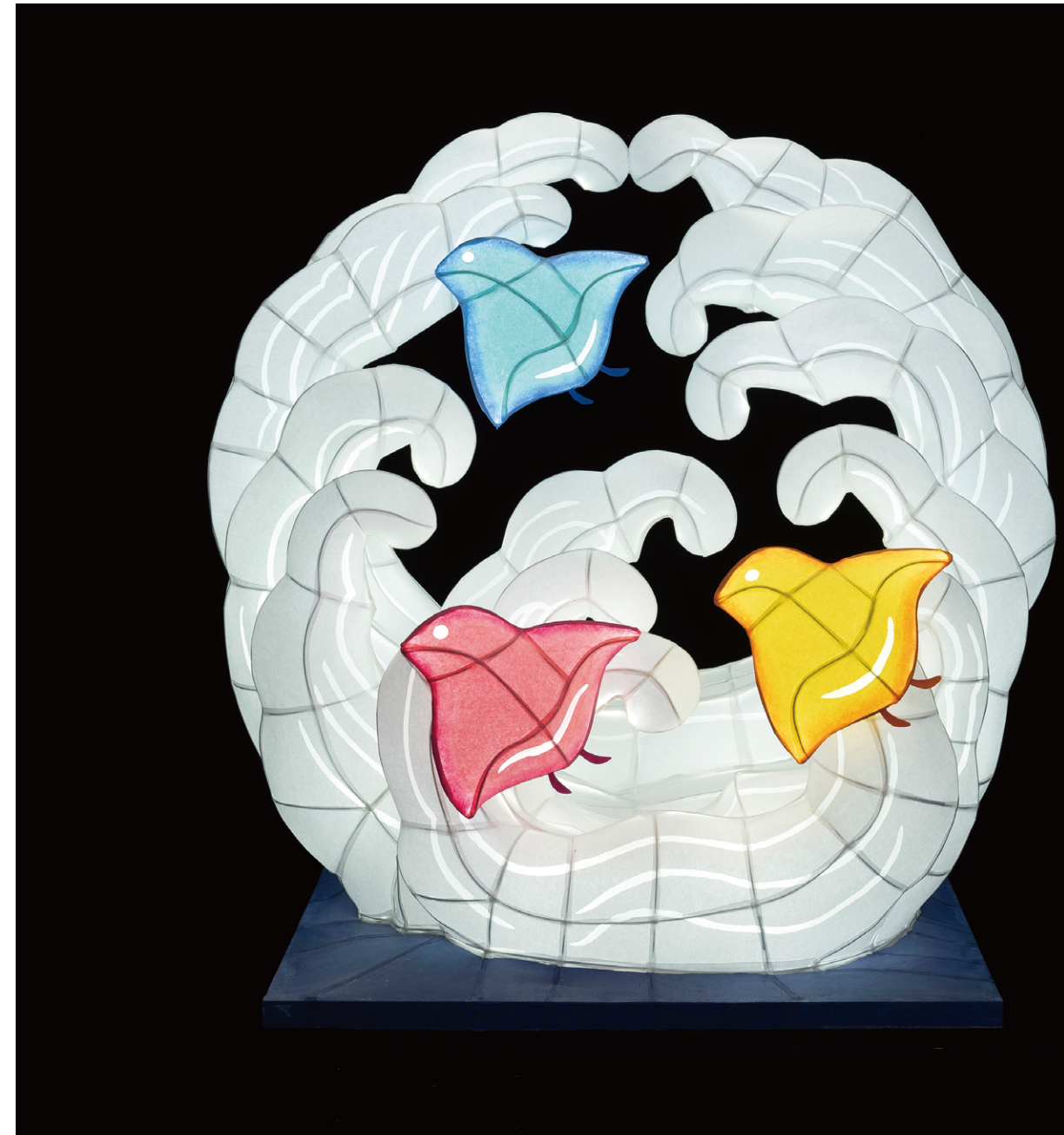
TEZUKA Shigeki

今回のNEBUKOでは、「波に千鳥」という平面の家紋を立体化することを試みた。この家紋は夫婦円満や家内安全という吉祥文様で縁起も良く、また荒波を越えていこうという意味も込めている。

ねぶた制作の針金を曲げる、紙を貼るという技術は年数を重ねるとできてる。手の技よりも何をどう作るのかが大事なので、常に世の中にアンテナを張り続けている。また、頭の中のイメージを作るために画力の向上も大事だと考えている。

1975年青森市生まれ。1980年佐藤伝蔵(第3代ねぶた名人)のねぶたを見て感銘を受ける。高校時代、千葉作龍(第5代ねぶた名人)の講演を聞き、ねぶた師の道へ。2001年から竹浪比呂央(第7代ねぶた名人)に師事。2014年より大型ねぶたを制作。

Born in Aomori City in 1975. In 1980, he was deeply moved by the 3rd gen. Nebuta Grandmaster, Sato Denzou. Since 2001, he has been apprenticing under the 7th gen. Nebuta Grandmaster, Takenami Hiroo. He has been making large-size Nebuta since 2014.



D75×W100×H97cm

林 広海

HAYASHI Hiromi

川の波をつくり、鯉の滝登りという出世するイメージをあわせた。鯉は、色つけ・色なし・針金のみという3種類を制作し、波に配置する。祭りのねぶたではカラフルにするが、この波はあえて暗めの色付けにしてみようと思う。こういう機会だからこそ、やってみることができる表現を試みた。

祭りのねぶたでは、人形部などの本体は墨を引いて輪郭などを表現するが、背景となる部分には墨を使わないので、実は難しい。

1968年青森市生まれ。千葉作龍(第5代ねぶた名人)に師事。2017年より大型ねぶたを制作。

Born in Aomori City in 1968. He apprenticed under the 5th gen. Nebuta Grandmaster, Chiba Sakuryu. He has been making large-size Nebuta since 2017.



D103×W146×H84cm

吉町 勇樹

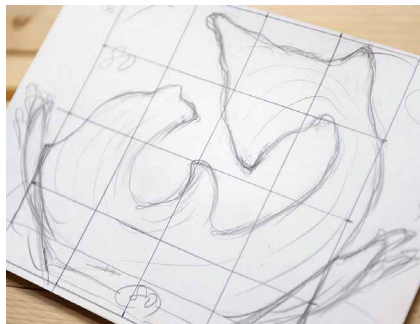
YOSHIMACHI Yuki

青森県の形(まさかりの形の下北半島と津軽半島の間にある陸奥湾をかかえる)をもとに、渦巻くような波を表現した。色も青色や緑色を使い、強い波を表し、同時に「ねぶた」としての「波」の表現にもこだわった。

図鑑でみたままのようなリアルな形で作っても、それは「ねぶた」にはならない。簡略化と盛り(デフォルメ)があってこそ「ねぶた」になる。「ねぶた」らしい雰囲気的大事にしている。

1989年青森市生まれ。2017年より千葉作龍(第5代ねぶた名人)に師事。名人最後の弟子。2022年より大型ねぶたを制作。

Born in Aomori City in 1989. Since 2017, he has been apprenticing under the 5th gen. Nebuta Grandmaster, Chiba Sakuryu. He is the Chiba's last apprentice. He has been making large-size Nebuta since 2022.



D90×W161×H101cm

福士 裕朗

FUKUSHI Hiroaki

動く波を一本ずつ細かく表現する技法と、波の造形として中に描く我生会*の技法の2つを取り入れて、今回の波に挑戦してみた。青森湾をイメージした日本海の深い群青色を使い、捻らず、遊ばず、冒険せずに着彩した。照明も岩となる部分には温かみのある色、波となる部分には青みがかった爽やかな色のライトを用いた。

通常ねぶたを制作する際には、実は細部にはこだわらない。また説明しないとわからないような表現はしない。遠くから見て、綺麗で圧倒するような迫力を一目であたえるように制作している。

1981年青森県五所川原市生まれ。我生会でねぶたを学ぶ。2008年から五所川原立佞武多(たちねぶた)制作者となり、大型立佞武多3台を手がける。2023年より大型ねぶたを制作。

Born in Goshogawara City in 1981. He learned to make Nebuta floats at the *Gashokai*, an organization for the making of Nebuta. Since 2008, he has been making *Tachineputa* for Goshogawara City's summer festival, and he also looks after and maintains the three large *Tachineputa*. He has been making large-size Nebuta since 2023.

*「我生会(がしょうかい)」は、鹿内一生(第4代ねぶた名人)が 起こした。



D103×W144×H90cm

塚本 利佳

TSUKAMOTO Rika

波の満ち引き、満潮・干潮というのは月の引力によってひき起こされる。その引力に引っ張られる波は、穏やかな時もあれば荒い時もあり、自然ならではのさまざまな表情を見せる。その神秘的な波の様子が伝わるような表現ができればと思っている。色はあまり付けず、波しぶきの、きれいな、優雅な感じが出せればと思う。

1985年青森県中泊町生まれ。「ねぶたの家ワ・ラッセ」で、のちに師匠となる北村隆(第6代ねぶた名人)の作品に感動し、ねぶた師の道に進むことを決意し、弟子入り。2023年より大型ねぶたを制作。

Born in Nakadomari Town in 1985. She decided to become a Nebuta artisan when she saw and was moved by the work of the man who would later become the 6th gen. Nebuta Grandmaster, Kitamura Takashi, at the Nebuta Museum WA RASSE. She later became Kitamura Takashi's apprentice, and has been making large-size Nebuta of her own since 2023.



D90×W125×H90cm

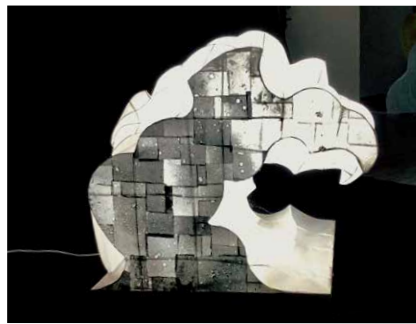
野村 昂史

NOMURA Takashi

波を正方形にブロックのように切り取ってみたいと考えた。そして、羊羹のような色が層になっているイメージもある。長年、つがる市の福祉作業所と交流があり、そこで作られている牛乳パックから作られた紙、余った墨、大型ねぶたを作る際に出た短くなって使われなくなった針金を使って制作した。今回の作品では、この「御縁」を作品に込めるとともに、廃材をなるべく残さないようにした。

1975年青森県五所川原市生まれ。2003年から竹浪比呂央(第7代ねぶた名人)に師事。2023年より大型ねぶたを制作。

Born in Goshogawara City in 1975. Since 2003, he has been apprenticing under Takenami Hiroo, the 7th gen. Nebuta Grandmaster. He has been making large-size Nebuta since 2023.



D104×W80×H87cm

現代いけばな作家／いけばな龍生派家元一級教授

菊池 仙陽

青森市在住。1988年より造形作品を発表。植物からインスピレーションを得、植物のみならず、さまざまな素材で作品を発表している。個展、コラボレーション展におけるインスタレーションや、他流よりの招待出品・野外展など多数参加。

Modern Ikebana Artist / Ryuseiha Ikebana Master

KIKUCHI Sen'yo

Lives and works in Aomori City, and has exhibited plastic three-dimensional artwork since 1988. Inspired by natural plant life, she works not only with plants, but a variety of other materials as well. She has participated in many solo and collaborative exhibitions of installations, invitations from other schools, and outdoor exhibitions.



《The Seeds of Waves》(波の種)

ちり紙、ワイヤー、スチール
W250×D85×H85cm、2024年



画家

木戸 永二

普段のスケッチを基に、頭の中で混ぜこぜに再構成しなおすことが多く、そのため作品は、想像上の岩や木になることが多い。この林檎の木をひたすら描いていた事もあったが、2013年の雪害で倒れてしまいもう存在はしない。そしてその木の姿も想像上の姿として頭の中で変化している。

1983年青森生まれ。現在、青森中央短期大学幼児保育学科で講師をしながら制作、発表活動を行う。自然の中にある「相(姿、形、ありさま)」に触発されることが多く、「スタンディングストーン(岩)」や「樹木」を主なモチーフとする。

Painter

KIDO Eiji

Born in Aomori City in 1983. He is currently creating and presenting his artwork while teaching at Aomori Chuo Junior College Department of Infant Care and Education. He uses two different techniques in his artwork: pen drawings and knife-carving drawings. He is often inspired by the “forms” and “shapes” of nature, and his main motives are standing stones and trees.



左:《Bark 2》(樹皮2)
アクリル絵具、彫刻刀/木製パネル
150×56.2cm(額含む)、2020年

中央:《I know you, memories》(わすれられない)
アクリル絵具、彫刻刀/木製パネル
162×390.9cm、2014-2024年

右:《Bark 1》(樹皮1)
アクリル絵具、彫刻刀/木製パネル
150×56.2cm(額含む)、2019年



NEBUCO Exhibition 1

アニメーター／映像作家／イラストレーター

間山 マミー

青森市在住。グラフィックデザイン事務所、広告代理店を経て1996年からフリーランス。普段は広告をメインにCM制作やキャラクター制作等の活動をしつつ、他にも池田爆発郎(「PiNMeN」監督)、森田宏幸(「猫の恩返し」監督)との3人で活動しているアニメーションユニット「ボムフォー 64」として、国内外の映画祭へアニメーション作品を発表している。日本アニメーション協会(JAA)会員・日本アニメーション学会(JSAS)会員。

Animator / Filmmaker / Illustrator

MAYAMA Mammy

Lives and works in Aomori City. He is a member of the Japan Animation Association (JAA) and the Japan Society of Animation Studies (JSAS). After working for a graphic design office and an advertising agency, he has been freelancing since 1996. In addition to his usual activities in mainly advertising-focused commercial production and character creation, he also presents the works of the animation unit “Bomb for 64”, which he runs collaboratively with Ikeda Bakuhaturo (director of “PiNMeN”) and Morita Hiroyuki (director of “The Cat Returns”).



《NEBUCO1990》アニメーション動画、1分39秒、2024年



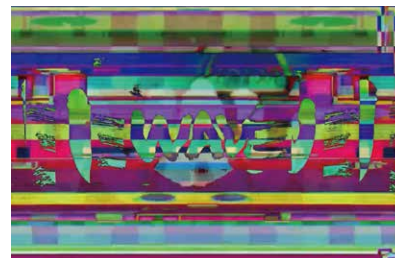
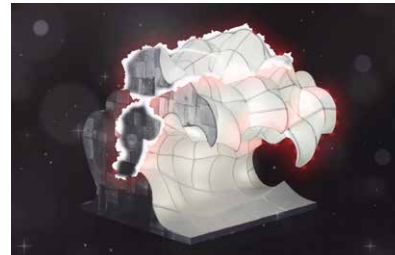
NEBUCOプロモーション動画、4分35秒、2024年

DJ ライナス

2014年青森市生まれ。4歳の頃から多言語に興味を持ちはじめ、文字を用いた作品制作のほか、コンピュータによる動画制作や楽曲制作も行い、その活動をテレビや新聞等で度々紹介される。2023年には個展を開催。

DJ Linus

Born in Aomori City in 2014, and became interested in multilingualism at the age of 4. In addition to creating artwork using letters, he also creates computer-generated moving images and music, and his activities are often featured on TV and in newspapers, etc. He started holding solo exhibitions from 2023.



Video Works DJ LINUS
Music DJ LINUS
Special Thanks
Photograph Koji Nishikawa
Nebuta Bayashi Naofumi Waku
and Aomori wa no Kai



《NEBUKO x DJ LINUS Nebuta Remix》ビデオ、3分12秒、2024年



NEBUCO Exhibition 2

NEBUKO Exhibition 2

マテリアルな相貌がむき出しの車両甲板に、15体もの「ねぶこ NEBUKO」が漆黑の中に浮かび上がる燈籠のように展示されたExhibition 1

会場には、自然と静寂を引き寄せる厳かな雰囲気は漂っていたが、Exhibition 2の会場は、併設のワークショップコーナー、グッズ販売ブースから常に賑やかな声が響いていた。加えて、八甲田丸の現役時代の客室であった名残がそこかしこに残っていたこともあってか、Exhibition 1とは対照的な、陽気な雰囲気に包まれた会場であった。

展示作品を大別すると、幸畑小学校、東中学校美術部の児童生徒が作成した「グローバル・サインボード」、JAGDA(公益社団法人日本グラフィックデザイン協会)メンバー5名のポスター作品、サイトウパピコのドットアート作品の3つに分かれる。

「グローバル・サインボード」は、「お手を触れないでください」や「飲食禁止」等といったサインボードを児童生徒たちが多言語で製作したものだ。英語、中国語(簡体字、繁体字)、韓国語、ベトナム語、タイ語に加え、津軽弁によるサインボードをそれぞれのネイティブスピーカーを講師に迎え、製作するワークショップを7月に開催した。サインボードを飾り付けるアイテムとして今回、実際の大型ねぶたに使用していた紙を使用した。

大型ねぶたは、ねぶたの家ワ・ラッセでの年間展示が決まった作品や、別の地域の祭り等に使用される予定がある作品を除けば、基本的には祭りの終了と同時に解体されるのが一般的である。解体の際には、山車の中に張り巡らされた電球や配線を取り出す必要があるため、骨組みを覆っている紙は破られ、剥ぎ取られていく。ねぶた師が何か月の間、精魂を傾けて描いた作品が遠慮仮借なく破られ、切り取られていく現場に居合わせる「ああ、もったいない」とつい叫びだしそうになるが、彩鮮やかな大量の紙片たちは残念ながら、そのままごみとして処分されてしまう。今回はその紙を再利用する形で、デザイン・ボードのデコレーションに用いることとした。

紙をどのように使用するかは、児童生徒達の思うがままに任せることにした。その

おかげで、様々な工夫の跡が見受けられるユニークな作品が多く寄せられた。

ちぎり絵の要領で、細かくちぎった紙片を敷き詰めて飾り付けた子や、ねぶたの一部とわかるような蠟書きの部分を集めて飾り立てた子、草花やハートなどの形に切り取って切り絵の様に紙を使用した子など、児童生徒は自主的に考えて取り組んでくれた。

JAGDAメンバーの作品は、「ねぶた」や今回のテーマである「波」、会場となっている八甲田丸が本年60周年を迎えることなどにちなんだポスター作品である。参加した5名はグラフィックデザイナーとして活躍しており、それぞれが意匠を凝らしたイラスト、写真、タイポグラフィ等を出品し、全く違うタイプの作品が並ぶ華やいだ展示となった。作品はそれぞれポストカードとしてグッズ販売コーナーでも販売され、そちらのほうも好評を博していた。

サイトウパピコの作品は鮮やかな青が印象に残るドットアートである。富嶽三十六景《神奈川沖浪裏》の富士山をアスパムに置き換えた《青森湾～波濤の先へ》という作品では、グローバル・サインボード同様に、ねぶたの紙片が用いられている。造形物としての役目を終えたねぶたの一部が画材へと変容し、新たな作品となって生まれ変わる変転の過程に、ねぶたのDNAが姿かたちを変えて新たな命を芽吹かせる、そんな物語を感じさせる作品であった。

Exhibition 2は、この街に根付く独自文化の総称としての「ねぶた」の、その新たな魅力や可能性を引き出す実験を、アーティスト、デザイナー、地域の子どもの手によって試みてみた、いわば「実験場」のような会場であった。一回きりの「実験」では試しきれないほど、「ねぶた」というコンテンツには大なる魅力と可能性が秘められており、今回は、「ねぶた」のほんの一部を取り出して、新たな光を当ててみたにすぎないと思っている。

今回の展示企画を機に今後、アーティスト、クリエイター、ねぶたを愛する多くの人達の中から「ねぶた」の新たな魅力を発見し、発信していくムーブメントが醸成されていけば、とそのような期待を抱いているところである。

中川 広樹



《波紋 HAMON》
(dot art)
アクリル絵具
キャンバス
116.7×91cm、2022年



《青森湾～波濤の先へ》
(NEBUTA dot)
ねぶた山車
CCP(服の廃材で作られた紙)
アクリル絵具／キャンバス
各53×45.5cm、2024年

ドットアーティスト

サイトウ パピコ

1976年青森県西津軽郡鰺ヶ沢町生まれ。鶴田町在住。Design L'oiseau Blue(デザインロワゾブルー)代表。アボリジニアートの世界観に惹き込まれ、独学で手法を学びドットアートを創作。廃棄される素材を作品制作に取り入れることで、子ども達と一緒に環境問題を学びながら表現を楽しむ活動に取り組んでいる。

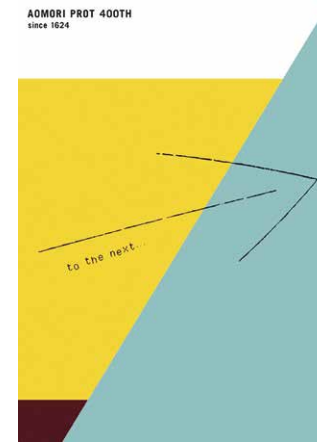
Dots Artist

SAITO Papico

Born in Ajigasawa Town in 1976. Lives and works in Tsuruta Town. Representative Design L'oiseau Blue. Drawn to the world of Aboriginal art, she taught herself how to create dot art.



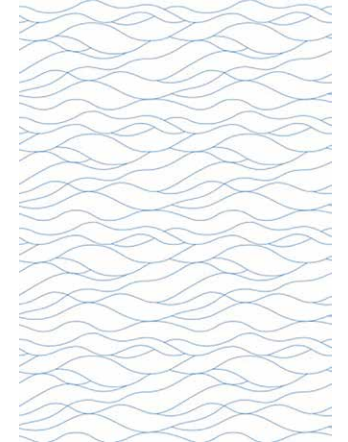
《波折 HAORI》
(terra art)
アクリル絵具／キャンバス
53×45.5cm、2024年



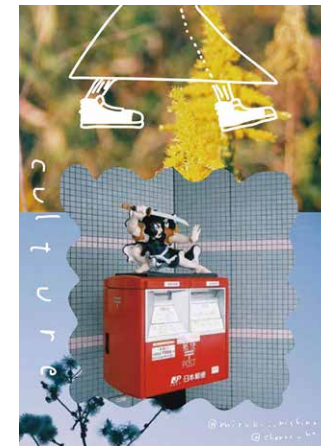
サトウ タカズミ
《next Aomori Port》



MARU
《青森港四〇〇年一絵四景》



字と図
《波間》



花田 耕助
《西野の写真》



山口 慶一郎 / SEED DESIGN
《Aomori minato in summer》

JAGDA AOMORI

JAGDA青森地区有志メンバー

NEBUKO Fes会期前に行われた幸畑小学校、東中学校美術部、青森市適応指導教室の児童生徒へのグローバルサインボードのワークショップの講師を担った。またExhibition 2では、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸やみなとまち青森をイメージしたグラフィックポスターを展示し、ポストカードとして販売した。

(TS)

JAGDA(公益社団法人日本グラフィックデザイン協会)は日本全国に約3,000名の会員を擁するグラフィックデザイナーの職能団体。現在17名のデザイナーが青森会員として活動している。青森地区では、会員ではない県内デザイナーと一緒に地域のデザインを発信するイベントを定期的に開催。また、地域の取り組みや企業のブランディングに対しては有志メンバーでデザイン参加している。

JAGDA (Japan Graphic Designers Association)

Professional association of graphic designers with approximately 3,000 members throughout Japan. Currently, 17 designers are active as Aomori members. The Aomori region regularly holds events to promote local design together with designers in the prefecture who are not members. Volunteer members also participate in local initiatives and corporate branding.



関連展示

NEBUCO Fesでは、15名のねぶた師を取材し、制作風景を撮影した。この写真は、メインビジュアルや動画作成に使用されたほか、7月1日から8月13日まで「西川幸治写真展～波の生まれるところ～」(青森駅自由通路)にて展示された。

(TS)

写真家

西川幸治

STUDIO・2GRAM代表、青森県広告写真家協会(AAPA)会員、青森市在住。2004年に独立し、商業フォトを中心にセールスプロモーションやインターネット、マス媒体、雑誌、個人ポートレート等々様々な写真と映像撮影をしている。毎年のねぶた祭りとねぶた師や制作風景の撮影をしており記憶と記録を残す為のライフワークとしている。

Photographer

NISHIKAWA Koji

Representative STUDIO・2GRAM. Lives and works in Aomori City. He is a member of the Aomori Advertising Photographers Association (AAPA). Since becoming independent in 2004, he has been shooting a variety of photos and videos, mainly commercial photography, but also sales promotions, Internet, mass media, magazines, personal portraits, and so on.



NEBUCO Products

NEBUCO Fesのカテゴリの一つであるProducts(商品開発)としてNEBUCOグッズを製作し、展示期間中会場内で販売を行った。

関連商品の製作・販売は、展示会場を訪れる来場者の中には、イベントに関連したものを購入したいと考える方が一定数いることを想定し、そのニーズに応えたいという目的の他に、地元のクリエイターには新たな視点から「ねぶた」を捉え、従来にない「ねぶた」関連商品や企画を生み出すきっかけとしてもらいたいという試みで企画された。

「ねぶた」関連商品といえば、大型ねぶたの写真や下絵を使用した、一見してねぶたとわかる商品を思い浮かべるが、プロジェクトに参加のデザイナーには今回、「祭りのねぶた」の定型から一線を画したアイデアを考案するよう依頼した。

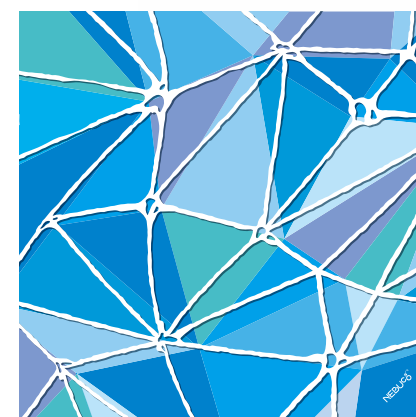
「ねぶた」の文化・伝統を、従来からある商品とは異なる表現で商品化するために

はどんな方法があるのか?本プロジェクトで、風呂敷、手ぬぐい、豆皿を担当したデザイナーのちばれいこは、ねぶた制作現場を訪れた際に目にした、紙貼りを行う前のねぶたから伸びる陰影にヒントを得て、デザインのイメージを膨らませたという。

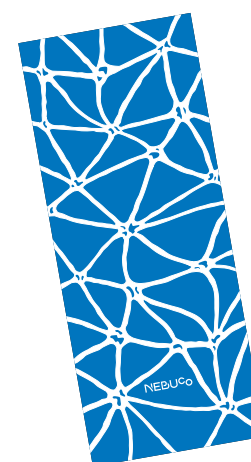
不規則に伸びる枝のようなデザインに帰結した商品からは、直感的に「ねぶた」とわかる明朗さは無いものの、「ねぶた」独特のフォルムに着想を得ているがゆえに、そのデザインからはたしかに「ねぶた」らしさが感じられる商品となっていたことから、来場者からも好評で、多くの方にご購入いただいた。

参加デザイナーは、長年に渡って刷り込まれてきたイメージから意図的に離れることで、ねぶたの新しい魅力を発見したのではないだろうか。

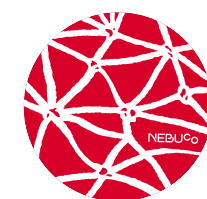
(NH)



風呂敷(約100cm角)



手ぬぐい(3色・37×91cm)



豆皿
(3色・Φ10.6×H1.5cm)

グラフィックデザイナー
ちばれいこ

1977年青森市生まれ。仙台のデザイン事務所を退職後、青森へUターンしデザイン事務所に勤務。現在は、フリーランスとして活動。ロゴマーク、ポスター、チラシ、商品パッケージ、キャラクターデザインやデザインアドバイザー、ワークショップ講師なども務める。

Graphic designer
CHIBA Reiko

Born in Aomori City in 1977. After working at a design office in Sendai, she returned to Aomori and worked at another design office here. She currently works as a freelance designer, designing logos, posters, flyers, product packages, characters, and more. She has also worked as a design advisor, workshop lecturer, and so on.

NEBUCO Workshop coNEBUCOを作ろう!!

Exhibition 2の一角に設けられたワークショップ会場では、「coNEBUCO(コネブコ)」と名付けた針金と和紙で作ったミニ行灯の製作体験を実施した。

企画はMARU(チャレンジャー/グラフィックデザイナー)で、製作は工藤友哉(ねぶた作家/グラフィックデザイナー)が行い、波の先端を模した烏帽子型の針金の枠に、参加者は紙貼りと絵付け(あらかじめ紙貼りをしたものに絵付けだけを行うこともできる)というねぶた師が実際にしているねぶた製作の過程を体験できる企画である。

ねぶたの街・青森市にあっても、実際にねぶたの製作体験ができる機会というのはあまり多くはない。繊細な針金の型の扱いが難しいことや、蠟の使用による事故の危険性などがおそらく要因であろうが、今回のワークショップでは、年齢に問わず楽しく安全に参加ができるよう、凹凸の少ないシンプルな形状を採用し、必ず講師の目が届く場所で安全に配慮しながら実施した。

色付けで選べる色も、ねぶたの一般的な彩色の範囲にこだわらず、淡い色合いのカラーも選べるように工夫したため、会場には子どもたちの声が会期中を通じていつも賑やかに響いていた。

参加者は、奉書紙の独特の手触りや会場に立ち込める蠟の匂い等、五感で「ねぶた」を実感できる空間で、製作サポートのMARU、工藤、服部の三講師から、蠟の散らし方や色の滲ませ方等、ねぶたで用いられる技法を教わり、思い思いのcoNEBUCOを仕上げている。

参加者の一人の「色を付けたいところを残して、蠟の筆を走らせるという普段とは逆の発想で描く体験を経て、ねぶたの奥深さやねぶた師の技量の高さに思いをはせることができた」という感想が印象深い。経験から得られる気づきが「ねぶた」への認識を深めるきっかけに繋がっていくことを願っている。

(NH)



株式会社 ツクリダス
(MARU、工藤友哉、服部與志彦)

グラフィックデザイン、地域デザイン、
ブランディング、アートプロデュース
を行う青森のデザイン会社。

TSUKURIDAS Inc.

(MARU, KUDO Tomoya, HATTORI Yoshihiko)

A design company in Aomori, Japan,
that provides graphic design, regional
design, branding, and art production.

NEBUCO Workshop グローバルサインボード作り

他言語サイン作りから見た
「モノづくりと教育」

今回のイベントでは、事前ワークショップとして学校を訪問し、外国人講師と共に多言語サインを作成する活動を実施した。この取り組みには三つの主要なねらいがあった。

一つ目は、ねぶたの紙を使ったものづくりを通じて地域の祭りや産業に触れることである。二つ目は、ものづくりの楽しさを体験し、興味や関心を高めることでキャリア教育に寄与することである。三つ目は、外国人講師が直接書き方を教え、多言語に触れることで国際感覚を磨くことであった。

この活動は、本市の学校教育の方針である「夢や志をもち挑戦する児童生徒の育成」にも貢献することを目指した。子どもたちは「タイ語が書けた」「台湾で使われている言葉が書けた」と自信を持ち、デザイン感覚に直接触れる貴重な機会となった。

イベント開催中には、会場で自分の作品を見つけて喜んでいる児童生徒の姿が多く見られた。今後もモノづくり教育で子どもたちの志を育てていくことが重要であると強く感じている。

(SM)



地元クリエイターによる
グローバルデザイン特別賞授与式
企画：(一社)青森市国際交流協会/AIVA

オープニングセレモニー

オープニングイベントは内覧会も兼ねた形で、来賓、関係者、報道関係者を招いて実施した。

出席者数は50名、報道関係者はテレビ局4社、新聞社3社から取材があった。

開会式の前には、NEBUCO Fesに映像作品を出展している小学校4年生のDJライナスによる自作の映像及び音楽作品の生演奏を行った。ダンスミュージックとねぶた囃子をミックスした曲に合わせて来賓の方を含む多くの方が

立ち上がって跳ね踊り、厳かに執り行われがちな通常の式典とちがう賑やかなムードでセレモニーはスタートした。

葛西実行委員長の挨拶に続き、来賓として参加された西市長、奈良岡市議会議長から祝辞を賜った後、テープカットセレモニーが執り行われた。

テープカットにも趣向を凝らし、一般的な紅白のリボンにハサミを入れる形式ではなく、「紙の芸術」とも称される「ねぶた」のイベントであることから、

紙製のテープを特別に用意して、代表の方々には思い思いにハサミを入れていただく方式を採用した。

NEBUCO作品については、ポスターやチラシ、Web上等では敢えて事前に公開しない方針であったことから、ねぶた師達が「波」という共通のテーマを、それぞれどのように表現したのか、この日初めてその全容が公開された。

同じテーマであっても全く様相の異

なる15体の作品が並ぶ会場を見学した方々からは、ねぶた師達の創造性や、ねぶた技法の表現力の豊かさを称賛する声が多く聞かれ、「ねぶたには、今後どんどん進化を続けていく伸びしろを感じる」、「まるで現代アートのようなメッセージ性を秘めた作品が並び、ねぶた師の作家性の高さに驚いた」といった感想が寄せられた。

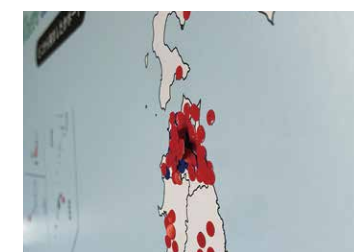
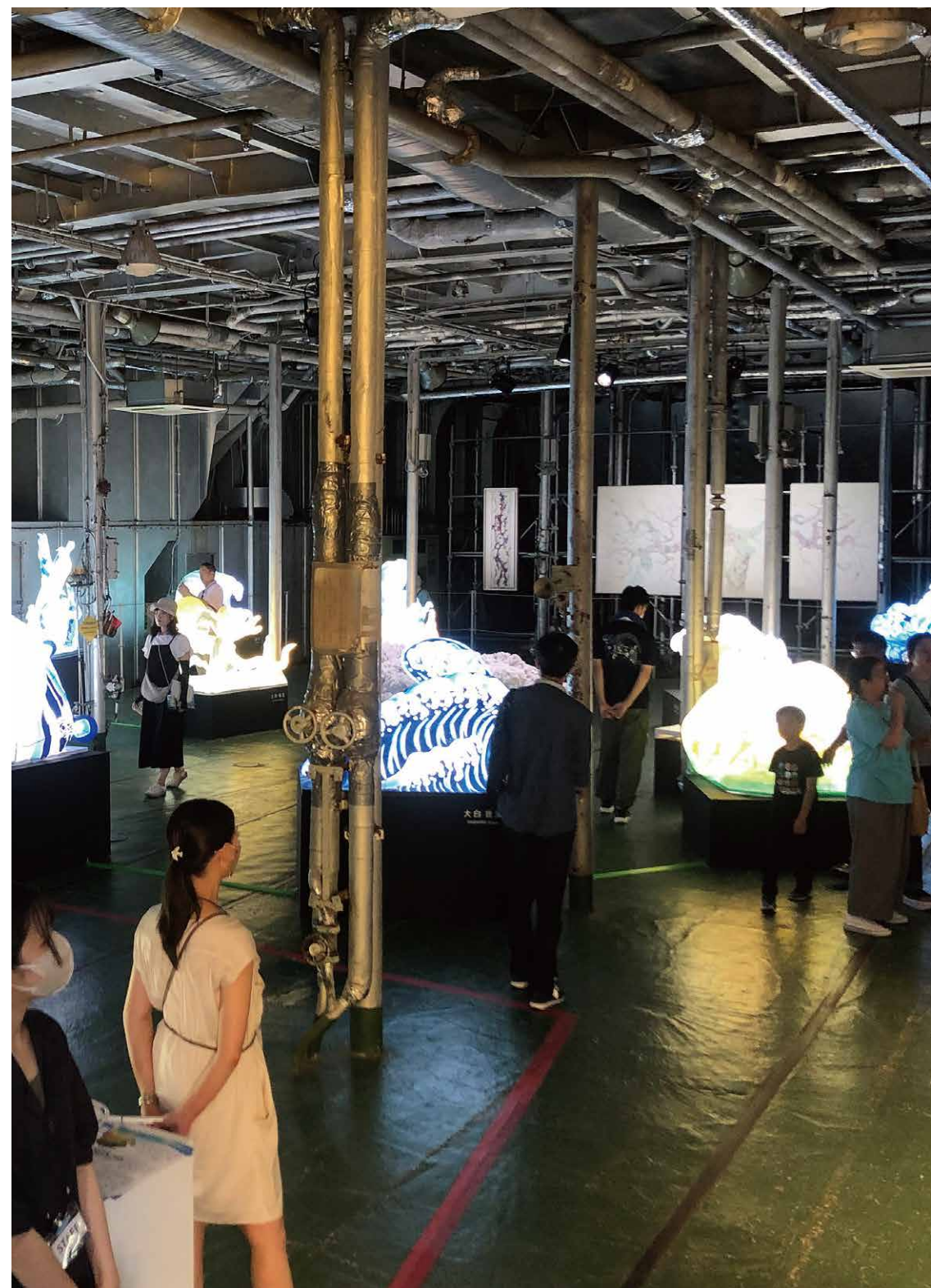
(NH)



八甲田丸と来場者

AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024は、多くの成功要因が融合し、一万人以上の来場者を魅了した記念すべきイベントとなった。天候には恵まれ、最終日のわずかな雨もミストシャワーとして心地よく楽しめた。駅前ウォーターフロントとねぶたミュージアム隣接の会場は、理想的なロケーションを誇る。波をテーマにしたNEBUCOの圧倒的な演出が会場を彩り、coNEBUCOワークショップもエンターテイメントとしての完成度が高く、参加者を楽しませた。また、かわいいキッチンカーが登場し、イベントに食の要素が加わることで、さらなる魅力がプラスされた。外国船の寄港と重なり、多言語チャシ対応や幅広い年齢層向けの企画が実現され、ダイバーシティがしっかりと表現された。さらに、バイトの大学生たちの積極的な声掛けも印象的だった。「天候、ロケーション、テーマ、時期、エンターテイメント、ダイバーシティ、食」の各要素が揃い、バランスの取れた企画が見事に調和し、青森を考える貴重な機会となった。

(SM)



プログラムデータ

《事業名》

AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024

《会期》

2024年7月31日～8月12日

《会場》

青森市港湾文化交流施設
青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸
〒038-0012 青森市柳川一丁目112-15地先

《主催》

AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024 実行委員会
青森市、青森市教育委員会

《協力》

(一社)青森市国際交流協会/AIVA
デジタルハリウッドスタジオ青森
NPO法人あおもりみなとクラブ



NEBUCO FESTIVAL 2024 全事業および参加者、関係者

《展覧会 NEBUCO Exhibition》 来館者数 10,683名

■ NEBUCO Exhibition 1

NEBUCO展示 / 北村 隆(第6代ねぶた名人)、
竹浪 比呂央(第7代ねぶた名人)、
北村 蓮明、内山 龍星、大白 我鴻、
諏訪 慎、北村 春一、北村 麻子、
立田 龍宝、手塚 茂樹、林 広海、
吉町 勇樹、福士 裕朗、
塚本 利佳、野村 昂史

立体作品展示 / 菊池 仙陽
平面作品展示 / 木戸 永二
動画作品展示 / 間山 マミー
動画作品展示 / DJ ライナス

■ NEBUCO Exhibition 2

NEBUCO制作取材写真スライドショー展示 / 西川 幸治
平面作品展示 / サイトウ パピコ
ポスター展示 / JAGDA青森地区有志メンバー
(MARU、山口 慶一郎(SEED DESIGN)、
字と図、花田 耕助、サトウ タカズミ)

グローバルサインボード展示 / 幸畑小学校5・6年生
東中学校美術部
青森市適応指導教室

■ 関連展示

「波の生まれるところ～制作の記録～」
(2024年7月1日～8月13日 会場:青森駅自由通路)
写真 / 西川 幸治

《オープニングセレモニー》

オープニングアクト / DJ ライナス
司会 / 里村 好美(株式会社エフエム青森)
音響 / 阿部 泰詞(サウンドベア)

《NEBUCO Workshop》

■ coNEBUCOワークショップ(イベント期間中参加者215名)
coNEBUCOクリエイター / MARU、工藤 友哉、服部 與志彦
サポートメンバー: 佐藤 雅

■ グローバルサインボードワークショップ(7月10日、12日開催)
幸畑小学校5・6年生、東中学校美術部、青森市適応指導教室
講師 / JAGDA青森地区有志メンバー
(MARU、サトウ タカズミ、字と図、佐々木 亜希子、
北畠 清美、ちば れいこ)
シーニティワット・ヨーシター、レー・アン・ドゥック、
ベン・バガス、ベ・ジュヨン、チン・ケイ、高安 弘大

《NEBUCO Products》

■ 風呂敷(2,000円)、手ぬぐい(3色、1,300円)、豆皿(3色、各700円)、
缶バッジ(150円)、団扇(販促品)
デザイン / ちば れいこ 企画進行 / BREST
■ ポストカード(5種、各150円)
デザイン / JAGDA青森地区有志メンバー
(MARU、山口 慶一郎(SEED DESIGN)、字と図、
花田 耕助、サトウ タカズミ)

《Social Media》

■ NEBUCO Fes公式ウェブサイト(<https://nebuco.jp/>)
■ YouTube(https://www.youtube.com/@nebuco_aomori)
■ X(https://x.com/nebuco_aomori)
■ Facebook(https://www.facebook.com/nebuco_aomori/)
■ Instagram(https://www.instagram.com/nebuco_aomori/)
■ TikTok(https://www.tiktok.com/@nebuco_aomori)
制作 / デジタルハリウッドスタジオ青森
(和久 尚史、キャナディ 綾香、野宮 元気、三上 莉奈)

《Food Service》

キッチンカーcotocoto(平澤 英輔、境 香織、福士 かれん)

《会場・物販スタッフ》

大滝 翔、石戸 里菜、石塚 凌平、伊藤 楽人、今 蔵斗、齋藤 翼、佐々木 みのり、
佐々木 悠衣、佐々木 玲子、佐藤 礼佳、杉 菜名、高橋 ひろみ、玉熊 里菜、
TRAN Huong Giang、徳差 優輝、中野 ありす、中野 優花、
中村 美羽、永野 向日葵、奈良岡 さくら、花井 千江美、棟方 良子、
森 琴、山口 結愛、横倉 芳昭

《企画・運営》

A.I.R.S / エアーズ(青森公立大学国際芸術センター青森サポート組織)
(白戸 はるみ、斎藤 誠子、西川 千秋、高橋 忍、中川 広樹、佐々木 玲子)
近藤 由紀(トーキョーアーツアンドスペース プログラムディレクター)

《翻訳》

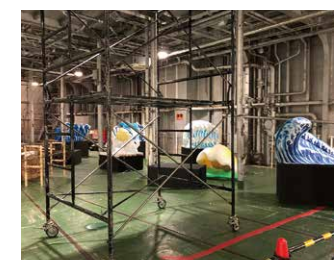
英語 / Ryan LIN、Ben VARGAS、Matthew LI、斎藤 誠子
韓国語 / CHO Hyeonjoo 繁体字 / 吳 詠心 簡体字 / 劉 海燕

《会場設営》

株式会社青森スタジオ、有限会社オフィスオーシー

《広報印刷》

青森オフセット印刷株式会社、有限会社オフィスオーシー



《テレビ》

3月21日 NHK
 4月16日 RAB/ATV
 4月22日 NHK
 7月30日 NHK/RAB/ATV/ABA
 7月31日 RAB/ATV/ABA

《ラジオ》

8月 5日 RABラジオ/FM青森
 8月 6日 RABラジオ

《新聞》

3月 7日 東奥日報
 4月16日 東奥日報
 4月17日 読売新聞
 7月11日 東奥日報
 7月31日 東奥日報
 共同通信社(秋田魁新報、東京新聞、埼玉新聞、奈良新聞)
 読売新聞

《雑誌》

『ra・kra』7・8月号
 『月間コロンプス』7月号
 『季刊あおもりのき』第18号
 『別冊2024ねぶた・ねぶたー真夏の波動ー』

《市広報紙「広報あおもり」》

7月 1日号 特集記事2
 8月 1日号 記事

《X(エックス)》

4月16日・7月10日・7月31日 青森市長公式
 7月16日・7月31日・8月 8日 青森市公式

《広報製作物》

ポスター (B2・300部)
 チラシ1 告知用 (A4・両面カラー・日本語/英語 30,000部)
 チラシ2 内容紹介用 (A4・両面カラー・日本語20,000部、英語2,000部)
 展覧会ハンドアウト (A3・2つ折り・両面カラー・日本語20,000部、英語10,000部)
 イベントバナー (600×1,800mm・5台)

《主なポスター掲示》

青森市役所各庁舎、各支所・情報コーナー、
 道の駅(ゆ〜さ浅虫、なみおかアップルヒル)、
 青森ねぶたラッセランド、協同組合タッケン美術展示館、
 青森市関係施設各所、
 青森市新町商店街アートパネル(29箇所)、
 青森県民生協、ハッピー・ドラッグ各店舗、
 WEB募集の店舗等、市内各所店舗等

《イベントバナー設置箇所》

青森市駅前庁舎、青森港国際クルーズターミナル、
 青森市文化観光情報施設「ねぶたの家ワ・ラッセ」、
 青森市観光交流情報センター、あおもり観光情報センター

《動画》

プロモーション動画/4分35秒(ウェブサイト用・横、各種SNS用・縦)
 ねぶた師個人ごとのプロモーション動画/15秒(SNS用・縦)
 開催中の様子動画/27秒(SNS用・縦)

《広報協カリンク、イベントなど》

AOMORI GOKAN アートフェスティバル2024
 「つながりのはらっぱ」サポーター
 青森観光コンベンション協会
 「あおもり案内名人」
 青森県観光国際交流機構
 「Amazing AOMORI」
 あおもりアーツカウンシル
 「イベント・ニュース」
 株式会社JR 東日本びゅうツーリズム&セールス
 「駅たびコンシェルジュ青森」
 東日本旅客鉄道株式会社盛岡支社
 「青森産直市(JR大宮駅)」

NEBUKO FESTIVAL 2024 実行委員会

顧問 / 西 秀記 青森市長
 実行委員長 / 葛西 崇 青森商工会議所 専務理事
 副実行委員長 / 六角 正人 (公社)青森観光コンベンション協会 専務理事
 佐藤 広野 あおもりアーツカウンシル 会長
 実行委員 / 菊池 孝康 (一財)青森市文化観光振興財団 文化会館 館長
 服部 浩之 青森公立大学国際芸術センター 館長
 竹浪 比呂央 青森ねぶた運行団体協議会 制作委員長
 船橋 正明 青森市経済部 次長
 泉 宏明 青森市教育委員会事務局 教育次長
 監事 / 田村 隆文 NPO法人あおもりみなとクラブ 事業部長
 事務局 / 白戸 はるみ A.I.R.S(エアーズ)
 斎藤 誠子 A.I.R.S(エアーズ)
 高樋 忍 A.I.R.S(エアーズ)
 アドバイザー / 近藤 由紀 トーキョーアーツアンドスペース プログラムディレクター
 オブザーバー / 東條 英哲 青森市教育委員会事務局文化学習活動推進課 課長
 櫻庭 雄介 青森市教育委員会事務局文化学習活動推進課 主幹
 神 実李 青森市教育委員会事務局文化学習活動推進課 主事



ポスター



チラシ2 内容紹介用(英語)



展覧会ハンドアウト

AOMORI NEBUKO FESTIVAL 2024

The AOMORI NEBUKO FESTIVAL focused on the "form of expression" within the finer details and "techniques" quintessential to Nebuta*¹, utilized to depict water, flames, creatures, weapons, clothing, adornments, and patterns on the floats. NEBUKO*² created by 15

Nebuta artisans were on display alongside works by local artists and creators. Additionally, these NEBUKOs were used as the basis for the development of new products in conjunction with young creators of various fields who are active in Aomori.

The year of 2024 marks the 60th anniversary of the Memorial Ship Hakkoda Maru's service*³, and 2025-2026 marks the 400th anniversary of the birth of Minato-machi Aomori*⁴. In commemoration of these milestones, NEBUKOs worked created under the theme of "Waves" were on display.

*1 Nebuta is the float, which is an important centerpiece of the Nebuta Festival, a well-known summer festival in Aomori, and was designated as an Important Intangible Folk Cultural Asset of Japan in 1980.

*2 Differing from the complete Nebuta float, the NEBUKOs are works that express only a "part" of the final product made using the unique creative Nebuta techniques. We also added CO to the end of "NEBU" in Nebuta to make NEBUKO. CO represents "collaboration, cooperation" and the innovative "concept" embodied by NEBUKO. Also, we often attach the suffix "-kko" to names of things when speaking in the local Tsugaru dialect.

*3 The Seikan Liaison Ship, completed in 1964, celebrated its 60th anniversary on July 31st, 2024, so commemorative events had been planned for this special moment.

*4 In honor of the "400th anniversary of the opening of Aomori Port" and the "400th anniversary of Aomori's city development" in 2025 and 2026 respectively, the "Minato-machi Aomori 400th Anniversary Celebration" will be held. An organization will be created to carry on the cherished local culture, traditions, and history; raise awareness of port-centered city planning; and create a lively and collaborative environment for various organizations to execute commemorative projects.

Program Data

Periods:

July 31 - August 12, 2024

Venues:

Seikan Ferry Memorial Ship Hakkodamaru
Aomori Station East-West Passage

Organized by:

■ 2024 AOMORI NEBUKO FESTIVAL COMMITTEE

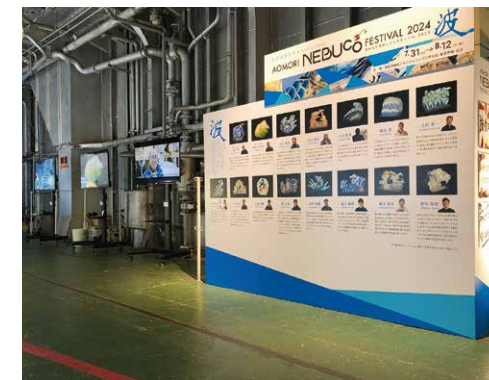
Aomori Chamber of Commerce and Industry
Aomori Tourism and Convention Association / Aomori Nebuta Festival Council
Aomori Contemporary Art Centre, Aomori Public University
Aomori City Cultural and Tourism Promotion Group (General Incorporated Association)
Aomori Arts Council
Specified nonprofit organization Aomori Minato Club
Artist in Residence Supporters (A.I.R.S)

■ Aomori City

■ Aomori Board of Education

In cooperation with:

Aomori International Relations Voluntary Association (AIVA)
Digital Hollywood Studio Aomori
Specified nonprofit organization Aomori Minato Club



Participating Creators

in no particular order, titles omitted

《 NEBUCO Creators (Nebuta artisans) 》



KITAMURA Takashi
6th gen. Grandmaster



TAKENAMI Hiroo
7th gen. Grandmaster



KITAMURA Renmei



UCHIYAMA Ryusei



OHSHIRO Gako



SUWA Makoto



KITAMURA Shun'ichi



KITAMURA Asako



TATSUTA Ryuho



TEZUKA Shigeki



HAYASHI Hiromi



YOSHIMACHI Yuki



FUKUSHI Hiroaki



TSUKAMOTO Rika



NOMURA Takashi

《 Collaborating Artists and Creators 》

KIKUCHI Sen'yo (Modern Ikebana Artist / Ryuseiha Ikebana Master)

KIDO Eiji (Painter)

MAYAMA Mammy (Animator / Filmmaker / Illustrator)

SAITO Papico (Dot Artist)

Members of JAGDA in the Aomori Region (JAGDA / Japan Graphic Design Association Inc.)

NISHIKAWA Koji (Photographer, STUDIO•2GRAM)

MARU (coNEBUCO Creator, TSUKURIDAS Inc.)

KUDO Tomoya (coNEBUCO Creator, TSUKURIDAS Inc.)

CHIBA Reiko (Graphic Designer)

DJ Linus

Projects of the NEBUCO festival 2024

■ NEBUCO Exhibition 1

Venue: Vehicle Deck of The Memorial Ship Hakkoda Maru

Exhibition of 15 Nebuta artisans and 5 creators.

■ NEBUCO Exhibition 2

Venue: Vehicle Deck of The Memorial Ship Hakkoda Maru

Artworks incorporating paper that was taken from Nebuta floats, posters that draw inspiration from Aomori's past as a small port town, and other creative works are on display.

■ NEBUCO Workshops

Venue: Large Multipurpose Hall of The Memorial Ship Hakkoda Maru

Take part in a coNEBUCO (small-scale NEBUCO) workshop. Paint pre-made coNEBUCO or try attaching the paper before painting. Both options were supervised by professional staff and used materials that incorporate the theme of waves.



■ Global Sign Display

Signs written in multiple languages by Higashi Junior High School Art Club, Kohata Elementary School Students, and others were displayed to welcome international guests.

■ NEBUCO Products

Original products designed by graphic designers who drew inspiration from the NEBUCO and Aomori's past as a small port town were available for purchase.



■ Relative Showcase

Venue: Aomori Station East-West Passage

Periods: July 1 — 31, 2024

“The Place Where Waves Are Born—Record from Construction”

A showcase showing the NEBUCO at different stages of their construction which photographed by Nishikawa Koji.



AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024 記録集

— 執筆

近藤 由紀、斎藤 誠子、高樋 忍、中川 広樹

— 翻訳

Ryan LIN、Ben VARGAS、Matthew LI、斎藤 誠子

— 写真

西川 幸治 (STUDIO・2GRAM)
A.I.R.S / エアーズ

— デザイン

ちば れいこ

— 編集

近藤 由紀
A.I.R.S / エアーズ

— 発行

AOMORI NEBUCO FESTIVAL 2024実行委員会

— 印刷

青森オフセット印刷株式会社

— 発行日

2024年11月30日

Printed in Japan

© 2024 AOMORI NEBUCO FESTIVAL